

2020年8月2日 説教「忘れられたヨセフ」

創世記 40 章 16～24 節

ポティファルに取り立てられてヨセフは、その妻の誘いを退けたことから監獄へ。そこで献酌官長の夢の解き明かしをしました。

1. 調理官長の夢の解き明かし (16～19 節)

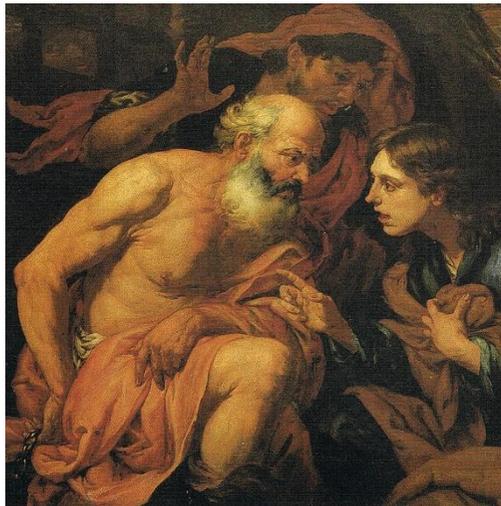
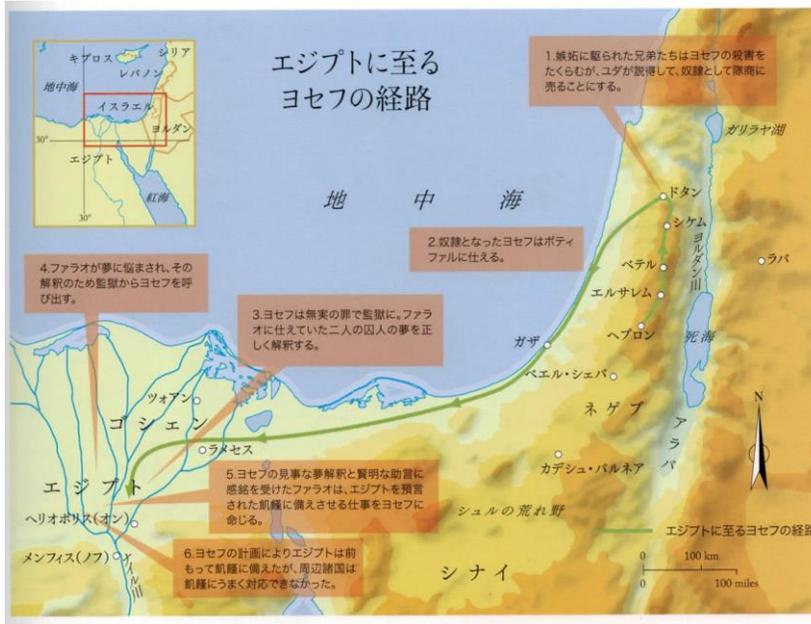
①調理官長の夢 (16) 「**調理官長は、解き明かしが良かったのを見て、ヨセフに言った。『私も夢の中で、見ると、私の頭の上に枝編みのかごが三つあった。』**」 献酌官長のぶどうの木の夢に関する、ヨセフの解き明かしは、三日のうちに、元の地位に戻るというものでした。調理官長は、それなら自分にも良さそうな答えが出て来るかもしれないと思ったのです。そして、自分の夢を伝えたのです。それは、彼の頭の上に木の枝で編んだかごが三つあるというのです。三つという面では同じです。物と設定は異なります。頭の上の枝編みのかごが三つ。

②鳥が食べてしまい (17) 『**一番上のかごには、パロのために調理官が作ったあらゆる食べ物が入っていたが、鳥が私の頭の上のかごの中から、それを食べてしまった。』**」 夢の続きです。頭の上の一番上のかごには、調理官が作った食べ物がすべて入っていたのです。そして、大事なことは、それらの食べ物はパロのために作られたということです。ところが、鳥がやってきて、それらを食べてしまったのです。「食い荒らした」と表現した方が良くもしません。この夢が、三つあるかごに、食べ物が分けられていたなら、解き明かしも異なっていたでしょうが、全部が一番上にあり、全て食べられたてしまったのです。

③あなたを木につるし (18～19) 「**ヨセフは答えて言った。『その解き明かしはこうです。三つのかごは三日のことです。三日のうちに、パロはあなたを呼び出し、あなたを木につるし、鳥があなたの肉をむしり取って食うでしょう』**」 ヨセフの夢の解き明かしの内容は、厳しいものでした。つまり、三つのかごは三日という意味です。献酌官長の夢と似ています。ところが、その後は大違いです。つまり、三日のうちに、パロは調理官長を呼びだし、なんと彼を木につるすというのです。チベット仏教では死者の鳥葬というのがありますが、ここでは、生きて木につるされた調理官は、その体の肉を鳥がむしり取って食べるというのです。なんとも、辛い解き明かしでした。

2. 献酌官長と調理官長の行く末 (20～22 節)

①パロの祝宴(20) 「**三日目はパロの誕生日であった。それで彼は、自分のすべての家臣たちのために祝宴を張り、献酌官長と調理官長とをその家臣たちの中に呼び出した**」さて、それから三日たちました。その日はパロ (エジプトの王) の誕生日でした。そこで、祝宴が張られたのです。それが家臣たちのためにもたれたものでした。そこにはすべての家臣が集められたのですから、ポティファルもいたことでしょう。そこにあの献酌官長と調理官長も獄の中から呼び出されました。



ランゲッティ「獄中で夢を解くヨセフ」

②献酌の役にもどり (21)「**そうして、献酌官長はその献酌の役に戻したので、彼はその杯をパロの手にささげた。**」パロの誕生祝宴の場に招かれた献酌官長はうれしかったことでしょう。加えて、元の仕事に戻されて、献酌の仕事をするのが許されたのです。パロに酌をするということは、信用を回復したということでもあります。ほっとしたことでしょう。あの獄にいた囚人(ヨセフ)の解き明かしの通りであったということ、心にとめたことでしょう。

③木につるされ (22)「**しかしパロは、ヨセフが解き明かしたように、調理官長を木につるした。**」一方、獄に入っていたもう一人の調理官長も、祝宴に呼ばれたところまでは、献酌官長と同じでした。そこに着くまでは期待感もあったことでしょう。しかし、パロは間もなく、調理官長を木につるしたのです。懲罰ということでありましょう。ヨセフが解き明かした通りでした。残酷ですが、鳥が彼の肉をむしり取って食うということになったことでしょう。

3. 献酌官長はヨセフのことを忘れ (23 節)

①献酌官長 (23)「**ところが献酌官長は**」献酌官長はパロ側近の役人です。この人は、なんらかの罪の疑いで、侍従長の監獄に入れられていました。しかし、獄中で神の恵みを受けたとも言えます。ヨセフが世話係となったからです。敬虔に神を信ずる者との関係が生まれます。そして、彼は獄中で夢を見ました。一緒に入獄した調理官長も夢を見ました。二人ともヨセフによって、夢の解き明かしをしてもらいました。献酌官長は三日のうちに役務に戻れるというもので、その通りになりました。一方の調理官長は木につるされてしまいました。献酌官長には罪が認められなかったからではありませんが、悩んでいる時に神の恵みにより、ヨセフの夢の解き明かしを通して、励ましや慰めを得ました。彼は大いに助けられたとあって良いのです。

②思いださず (23)「**ヨセフのことを思い出さず**」ところが、献酌官長は元の役務に戻ると、獄にいた時のことも、そこにいたヨセフのことも思い出しませんでした。それも、夢の解き明かしをもらった時に、「あなたがしあわせになった時には、きっと私を思い出してください。私に恵みを施してください。この家から私が出られるようにしてください」(14 節)と切に願われたのに、思い出さなかったのです。

③忘れてしまった (23)「**彼のことを忘れてしまった。**」献酌官長は元に戻ることができて、すっかりヨセフのことを忘れてしまったのです。確かに日々忙しくはあったでしょうが、嫌なことは忘れてしまっていたのでしょう。一緒に投獄され、木につるされた調理官長のことはもとより、大いに世話になり、氏素性まで聞かされてヨセフに同情もしたでしょう。しかし、ヨセフのことをすっかり忘れてしまったのです。もっとも、後になってパロの夢の問題が出た時に、思いだすので

すから、どこかにヨセフに配慮する心は残っていたのです。

《結論》

今朝の聖書箇所においては、調理官長のことが大半の章節を占めていますが、章全体から見ると、この部分は章の中心テーマではありません。つまり、調理官長が見た夢の解き明かしをヨセフがしていますが、それは大変厳しいものでした。そこから、調理官長はきっと大きな罪を犯していて、神の裁きには見落としがないという結論を出せないこともないでしょう。しかし、ここではむしろヨセフが献酌官長の夢の解き明かしに続いて、調理官長の夢についても、的確に解き明かしをしたというところに力点があるように考えられます。

今朝の聖書箇所では 40 章最後の 23 節は 1 節だけですが、いろいろな意味が込められていて、そこからメッセージをいただきましょう。

第一に「ところが献酌官長は、ヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった。」という文章の「献酌官長」の部分に「私」を入れ、「ヨセフ」の部分には「主なる神」を入れて読んでみたいのです。あの献酌官長が受けたヨセフからの恩恵は、とても大きかったのです。しかし、彼は時がたち、忙しくなると、自分のことが中心になり、ヨセフのことは全く忘れてしまったのです。私たちにも同じようなことがないでしょうか。主なる神から、大いなる恵みをいただいて来たにもかかわらず、感謝することを忘れて歩み、出て来る言葉といえば、不平や不満や後悔。生じてくる思いは、恐れや心配、妬みやののしり、憎しみや敵意……。主がなしてくださったことを思いだそうともせず、主のことを忘れてしまいやすいあなた、私、であります。今朝、改めて主がなして下さったすばらしき恵みを思いだしましょう。そして、感謝していきましょう。

次に、献酌官長がパロにヨセフのことを伝えなかった結果、ヨセフは監獄に留められることになりました。彼が獄から出るチャンスを得るまでに 2 年の年月が必要でした。何か罪を犯したわけでもなく、ポティファルの妻の怒りから、濡れ衣で獄中の人となったヨセフ。忘れられて、過ごした二年間は決して短いものではなかったでしょう。しかし、この期間こそがヨセフがその信仰が磨かれる時だったのです。父ヤコブ(イスラエル)がエサウを逃れて北のパダン・アラムにいて揉まれ、教えられ、整えられていった期間は 20 年。それに比べれば短いぐらいかもしれませんが。彼はこの日々待ち望む信仰を培われたことでしょう。そして、希望を持ち続けることも学んだことでしょう。ローマ人への手紙 12 章 12 節にこうあります。「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」

何年か前の教会の年間聖句でした。あなたにのしかかっている試練がいかに大きくても、望みを失わず、忍ばせていただいて、祈り続けていくことができますように。獄中であって、ヨセフは主の前に祈る心を教えられたことでしょう。試練は彼に堅い信仰をもたらしたのです。

「主よ、終わりまで、仕えまつらん、みそば離れず、おらせたまえ」（讚美歌 338:1）と歌ってまいりましょう。